



紙の上の 恋愛遍歴

赤川次郎

作家にとって、一番縁の深い「紙」といえば、やはり原稿用紙だろう。

今は四百字詰の原稿用紙を使う作家は数えるほどになったろうが、私は今も——この原稿も、原稿用紙に一文字ずつ書いている。

けれども、初めて小説を書いた十五歳のころからしばらくは、一枚に四百字しか書けない原稿用紙は、もったいなくて使わなかった。シャーロック・ホームズ物の真似から始めた小説は、細かい罫線のレポート用紙を小さな字で、びっしりと埋めて行ったのだった。レポート用紙一枚で、おそらく原稿用紙四枚分くらいにはなっただろう。

ミステリーの真似ごとから離れて、初めて書いた長い小説は、ヨーロッパ中世

(大好きな時代だった)の騎士物語だった。といっても、怪物退治やチャンバラとは無縁。国王に忠誠を誓った騎士と年若い王妃の、不倫の恋のお話だった。アーサー王伝説の騎士ランスロットの物語とよく似ているのだが、そのことは全く知らなかった。もしかすると、どこかで目にしたことがあったのかもしれないが、ともかく合戦や男の友情などには一向にロマンを感じていなかったのは確かである。

騎士物語に飽きて、高校二、三年生ごろに書いていたのが、パリの社交界で、やたら女性にもてる青年貴族を主人公にしたお話で、無垢な少女の恋心の方を熱心に描いていた。

中学高校六年間、男子校に通い、初恋どころか女の子と口をきくことさえほとんどなかったのに、よくまあ恋愛の話ばかり書いたものだと思える。我ながら大した想像力である。

原稿用紙にしたら、たぶん騎士物語は四、五百枚、パリのプレイボーイの話は千枚近くになっただろう。ただし、どちらも未完。誰も読んでくれるわけではないので、話を完結させる必要もなく、た



あかがわ・じろう●作家。1948年生まれ。1976年「幽霊列車」で第15回オール読物推理小説新人賞を受賞以来、ベストセラー作家として活躍。「幽霊」「三毛猫ホームズ」「三姉妹探偵団」など数々の人気シリーズを執筆。著作は600冊を超える。2005年、第9回日本ミステリー文学大賞、16年、「東京零年」で第50回吉川英治文学賞を受賞。

だ「書くことがひたすら楽しい」時期だったのだ。

社会人になってからもレポート用紙は続いて、結婚式を翌日に控えた女性の朝から夜までを書いた。何も事件など起きないのに、原稿用紙二、三百枚にもなつて、これは一応完結した。

この後は、仕事が忙しくなり、結婚もして、小説を書く時間が取れなくなって来た。そこで思い立ったのが新人賞に応募すること。初めて、四百字詰原稿用紙に書くようになり、数年後に「オール読物」の新人賞をいただくのである。

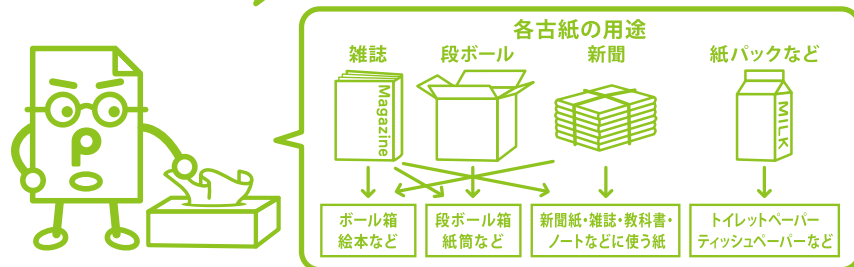
十代のころ、小説を書くことは私にとって唯一のオアシスだった。辛い日常生活も、小説の世界へ逃げ込めば忘れることができた。

もちろん、私にとって原稿用紙は大切な友だ。しかし、一番懐かしく思い出すのは、細かい罫線のレポート用紙のことなのである。

ペーパー君のつ・ぶ・や・き 活動

回収された紙、次は何になる？

段ボールはまた段ボールに。紙パックはティッシュやトイレトペーパーに。そうやって、一度使われた紙は回収されて、また新しい紙へと生まれ変わっていくんです。あなたが毎日いろんな場面で使っている紙とも、またどこかで会えるかも。



紙のことをもっと伝えたい。詳しくは、<http://kamitsubu.com/>「ペーパー君のつ・ぶ・や・き」WEBサイトをご覧ください。

次号は4月29日号です。

提供 ● 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

Photo : Shiro Miyake